

来ぶらり72

本と 図書館

Intermission
大学図書館と
花、自然

アメリカのベストセラー作家S・キングの近作『アトランティスのこころ』の中で、主人公の少年ボビーは11歳の誕生日に母親から成人用の図書館利用カードをプレゼントされる。「ボビーはオレンジ色の図書館利用カードをとりだして、シュウィン製二十六インチの自転車ではないが、このプレゼントだってわるくない。いや、最高のプレゼントだといえる。自分が探検できる本の世界がいきよに全世界規模にまで広がったのだ。」ここでは少年ボビーが成人用の図書館利用カードをもつことで、大人の世界に一歩足を踏み入れることの喜びが描かれている。少年にとって図書館とは生活の一部であり、極端に言えば人生の一部となっている。

Intermission 図書館を彩る春の花は白、淡紅色一面の桜が代表でしょうが、グランドに面した大樹の根の窪みに、春の柔らかい陽射しを浴びて、ひっそりと愛らしく咲いている、一株のスミレの花を観ると思わず笑みがこぼれます。

少年が11歳の誕生日を迎えたのが1960年。それから40年あまりがたち、図書館のあり方にもいろいろな変化がみられるようになった。コンピュータの導入やインターネットの普及にみられる図書館の情報化、そして電子ブックや電子ジャーナルの誕生にみられる資料の電子化が大きな変化の要因になっている。そして最近では本（印刷物）はすべて電子化されるので、これまでのような本は消えてなくなるとか、その本を所蔵してきた図書館そのものが消えてなくなるといった未来予測的な言説が散見されるようになった。しかしこのような言説がどこまで妥当性があるのかわかるとはじつのところ誰にもわからない。確かに一部の本がCD-ROMやDVDになったり、電子化されてインターネット上で読むことができたりするのは事実であり、今後もこの流れの向かう方向は変わらないだろう。しかしそのことが本や図書館が消えてなくなるといった言説に結びつくとも思えない。「本にはモノとしての面だけではなく、長期間、特定のモノとつきあいつづけることによって私たちのうちにかたちづくられた「習慣」としての面がある。紙と活字の本が、映像としての本、仮想現実としての本に「まるごと」とってかわられるためには、モノのかたちやしくみだけではなく、人間の生活習慣、本とのつきあい方が、完全に、それこそ細胞レベルで変わっていなければならない。」（『本はどのように消えてゆくのか』津野海太郎著 晶文社刊）

Intermission 自然の威勢が衰退して、静寂がもどる秋、図書館裏で木犀の花の香が漂いはじめ、入り口側の繁みで、棕の実が葡萄色に、飯桐の実いひつゆは茜色に垂れ下がり、柿の実が赤橙色に熟します。それらの色は日本の古典的な色彩とも思えます。寒気が訪れ、雪を被り折れ曲がった樺の黄色い花芯に目白が嘴を入れ、寒さで身の引締まる早朝、冴えた黒白青地色の四十雀が樹の幹、枯枝を細身の体を素早くせわしく機敏に飛び交います。

子どもといっしょに地域の図書館に出かけ、いろいろな絵本や物語を読み、帰ってきては今借りてきた本を親子ともどもごろりと寝ころがって読み聞かせをする時間は、私にはすでに貴重な生活習慣となっている。その場合、絵本を電子ブックにして、これを液晶の画面で読み聞かせをすることの必然性や必要性はほとんどない。したがってしばらくは本が電子ブックにとってかわられることもないし、図書館も姿や機能を変えながらも存在しつづけることになるだろう。しかしそのまた先のこととなると誰も確かなことはいえないのではあるが。

大学図書館 総務課 倉持仁志（本文）

奥田孝之（Intermission）

寺山 修司

言葉と映像のパワー

～ 没後20周年～

寺山修司原作の舞台を観た。「青ひげ公の城」、寺山が生前主宰していた劇団「演劇実験室 天井桟敷」の流れを引き継いだ劇団「万有引力」の公演だ。そこで私は大きな衝撃を受けた。恐怖を覚えるような大音量の音楽と隣の客席の様子も分からないほどの暗転。登場人物の摺るマッチが不安定な明かりを灯しては消え、火薬の臭いが観客の不安を煽る。登場人物たちはみなどこかグロテスクだ。観客席の間から突如出てきて、台詞を言いはじめる役者もいる。寺山演劇のシュールなエッセンスをてんこ盛りにしたような公演だった。はっきり言って、怖かった。途中までは、いつ劇場を出て行こうかと真剣に考えていたくらいだ。

しかし結局、私は最後まで舞台を観た。途中から恐怖よりも大きな力が私を支配し、出られなくなってしまったのだ。それは「言葉の威力」「イメージの威力」といったようなものだった。

寺山の作品には、演劇や映画を含め、ストーリーらしいストーリーのないものが多い。一つ一つのシーンの、言葉と視覚のイメージが重なりあって作品を構成している。寺山は生前「アングラ」パフォーマンスの旗手として活躍していたため、現実離れた過激な演劇に眉をひそめる人も多いようだが、実際は寺山言葉は大変リアルだ。寺山の活躍した当時のリアルさを実感できるような言葉、現代の私たちにも実感できるリアルな言葉。様々な言葉が矢継早に積み掛けてくる。

そのパワーを持った言葉たちは、リアルであると同時にたいへん気障でもある。日常生活の中では普通に表に出すことなどできない、どす黒い本質を言葉にする。そこで、非現実的な演劇や映像が登場するのだ。過激でグロテスクな異空間で、役者たちはリアルだが日頃口にできないような言葉を大声で叫ぶことができる。その現実と非現実の不思議な調和が、イメージの結晶となって観客に突き刺さってくるのだ。だから観る方も衝撃を受け止めるためにたいへん力を使う。実際寺山は「観客も俳優だ」という考え方で様々な上演

形態の演劇を作っている。

シュールで危うい感じ、同時にドロドロした土着的な感じ、また同時に俗っぽい感じ。寺山演劇は実に多彩である。映像作品も同じだ。不思議なイメージの連続である。20年以上前に撮られた作品だが、見たことのないような新鮮な映像イメージで溢れている。

今年は寺山修司の没後20周年にあたる。大きな書店で寺山の特集が組まれていたのを御覧になった方も多だろう。これを機会に、寺山のイメージ世界の扉を覗いてみてはどうだろう。言葉や映像には「力」があると、感じることもできるかもしれない。



「寺山修司記念館」青森県三沢市

『寺山ワールドを覗く』

● 寺山の演劇・映像作品

『寺山修司の戯曲』全9巻 / 思潮社
(大学図書館 / 女子大学図書館所蔵)

● 寺山のイメージ世界 (言葉編)

『寺山修司名言集 身捨つるほどの祖国
はありや』 / PARCO出版
(大学図書館所蔵)

● 寺山のイメージ世界 (ディープな映像編)

ビデオ『寺山修司実験映像ワールド』
(女子大学図書館所蔵)

私
感図書館と
図書館員

私が図書館員としてスタートしてからもうすぐ半年になる。この学習院大学図書館を初めて訪れたのは、1年程前のことだ。私が通っていた大学の図書館は3年前にできたばかりでとても近代的だったのに対して、学習院の図書館の印象は古風で、中学や高校などにあったような木製の大きな机や椅子も懐かしく、親しみを感じた。

大学図書館というと、卒論や授業で使う資料集め、試験勉強などのために訪れることが多いだろう。学生の頃、勉強をするために図書館に行ったはずなのに、面白そうな本や雑誌を見つけて読みふけてしまっただけで全く目的を果たせないこともあったが、そのような発見が図書館の面白さだと思っている。また、私にとって大学図書館は、たとえこれと言った用がなかったとしても、授業の合間や家に帰る前などに学生たちが気軽に立ち寄ることのできる場所、という印象がある。国内外の新聞や雑誌が揃っていて、パソコンも使うことができ、館内を歩いて読みたい本を見つければ借りて行けばいい。図書館では退屈することなく長い時間を過ごせるので待ち合わせにもよく利用されていた。友人と一緒に勉強したり、書架の間で偶然、しばらく会っていなかった人に会ったり、そんなちょっとしたことも楽しかった。大学図書館とは本を借りたり勉強したりするだけの場所だけでなく、もっと深く、学生生活と結びついている場所だとも思う。

就職活動中、本に関わる仕事をしたいと思っていたので、私の社会人としての職場が大学図書館と決まったときはとても嬉しかった。と同時に、図書館員とはどのような仕事なのかというはっきりとした知識がなかったため、不安でもあった。

実は私が図書館員になる前は、図書館員の主な仕事は貸出返却カウンターでの対応や書架に本をならべることだと思っていたのだが、それは資料と利用者を結び付けるという大きな流れのなかの一部分だったのだということがわかった。図書館にある資料は利用されてこそ意味があって、ただ棚に並べてあるだけではその役割を果たさない。だから、図書館には資料と人が出会う手助けをする図書館員が必要で、カウンターやレファレンスのように直接利用者と接することもあれば、資料検索のためのデータベース構築やホームページを始めとする情報サービスの構成などのように利用者と全く顔を合わせることはなくとも欠かすことのできない重要なポジションもあり、業務の内容もさまざまだが、利用者サービスという目的は皆同じなのだ。

私はまだ一歩踏み入れたばかりで勉強すべきことは山ほどあるが、学生時代に図書館に対して「こうしてほしい」と思ったことや図書館員と接した時に感じたことなど、利用者だからこそ気付くことが色々あると思うので、そのような利用者としての視点を忘れずに、利用者の立場から考えてより良いサービスを提供することのできる図書館員になりたい。



新規データベース

『大宅壮一文庫雑誌記事検索』

- WEB OYA Bunko - 紹介

駅の売店、一般の書店で市販されている週刊誌・総合雑誌に掲載された記事、論文を検索できるオンラインのデータベースです。雑誌記事の検索用データベースとして既にマガジンプラスを導入していますが、マガジンプラスは大学が発行する紀要、学会が発行する学会誌などを主に対象にしていますが、WEB - OYA Bunkoは主に一般大衆誌の検索を目的にしています。それぞれ使い分けてみてください。

大宅壮一は明治33年生まれジャーナリストでした。「本は読むものでなく、引くものだ」という言葉通りに、自ら膨大な資料を収集し評論活動を続けました。彼の没後、大宅壮一文庫という雑誌図書館が世田谷区八幡山に誕生し現在も増殖を続けています。ここでは独特の分類法が採用されており、年間8万人もの人に利用されているそうです。

データベースのWEB-OYA Bunkoでは、集められた雑誌の記事単位で検索が可能になっています。例えば以前、“ザッピングについて書かれた記事を探している”という学生がいました。その際にマガジンプラスを使いキーワードとして“ザッピング”を2002年1月～12月の期間で検索したところヒットしませんでした。同じ条件でWEB - OYA bunkoを使うと1件ありました。探しているテーマによりデータベースを使い分けて効率的な情報収集をしてください。実際に検索できる雑誌のリストはホームページ上から確認できます。

(<http://web.ffn.ne.jp/%7Eoyabunko/sakuin0.htm>)

データベースの操作についての質問は大学図書館2Fレファレンス・カウンターまでどうぞ。

大学図書館ホームページ

『外部オンラインデータベース』

『大宅壮一文庫雑誌記事検索をクリック』

星と惑星の写真図鑑：完璧版 Stars and planets / 日本ヴォーグ社 1999年 (2F参考室 請求記号：R443/6)

図鑑によると「アリステュロス、アウトリュコス、アルキメデス」これらは月のクレーターにつけられた名前である。合計35ものクレーターに名前がついているようだ。ルナエンバシー社の月の土地売買がかつて話題になったが「もし、自分だったらどこか」を考えながら月を眺めてみるのも楽しいかもしれない。内容は“はじめに、太陽系の惑星、88全星座、今月の星座ガイド”から成る。写真、図表が豊富でサイズは縦22センチと小

型だが索引、用語解説もある。88全星座のページには4種類のマークがついていて“肉眼 - 双眼鏡 - 望遠鏡 - 大型の天体望遠鏡で見える”に分けられる。一等星といった等級で星の明るさを表すこともできるがこの分け方はよりイメージが湧きやすい。ちなみに10月の星座ガイドにはM31、オリオン座流星群が見どころとある。星座を覚えたい、これから天体観測を始めようとする際に役に立つ一冊だ。

大学図書館 運用課 川中 はるか

「来ぶらり」のバックナンバーは大学図書館ホームページ (<http://www.glim.gakushuin.ac.jp/>) で公開しています。

来ぶらり No.72 2003年10月1日発行

発行責任者：藤原大輔 編集委員：川中 はるか・山本有里

学習院大学図書館 〒171-8588 東京都豊島区目白1-5-1

☎03-3986-0221(代) 内239㉔(参考) 内239㉗(閲覧) 03-5992-100㉔(閲覧直通)